

書 評

中村 剛著 『福祉哲学の構想—福祉の思考空間を切り拓く』 (みらい, 2009年)

岡崎 幸友

1 はじめに

魅力的なタイトルの書評を依頼されたことを光栄に思う一方で、その責務をどのように果たせばよいのか、本当に悩んだ。

本書の内容を概略的にまとめて、「読者」に紹介するのが書評本来の役割であることは十分承知している。しかし、本書を読み進めていくうちに、そのことに留まらず、筆者の問いに回答したい気持ちを押しさえきれなくなってしまった。「哲学」の本質は、「私が思惟する」ことにあるのだから、紙面を通して「筆者の思惟」と対話をし、「私」がどのように受け止め、読みこなし、思索したのか。その軌跡を提示することで、本書の書評とさせていただきます。

2 本書の構成（全体を俯瞰して）

筆者との対話に先だって、まずは本書の構成を概観してみたい。

本書は序章から終章までの9章立てであり、タイトルが示すとおり一貫して「哲学」的な考察がなされている。副題にもあるように「思考空間を切り拓く」ことが射程範囲であり、「見なかったこと」を「見る」ように促すのが、本書の到達点であるといえよう。

本書の「まえがき」に、筆者による各章の詳しい要旨が記されているが、私なりの解釈は次の通りである。

「序章 福祉原理についての試論」は、本書の骨髄である福祉哲学を理解するための4つの次元について提示し、それぞれが段階を経て思考を切り拓いていくことが論じられている。特に、「この私という当事者の視点（人間という存在の内側）から、尊厳という概念の意味を明らかにした」（42頁）と述べているように、本書を読み

進める上での立ち位置を明示したことによって、読者も視点を定め易くなっている。

「第1章 福祉哲学の構想」では、まず「哲学」をどう捉えているのかを考察した上で、「福祉」と「哲学」の接点について論じている。哲学はすべての学問の根元であるが、一方で科学の台頭によってその役割は囲い込まれつつある。本章では社会福祉学の土台は「福祉哲学という科学とは違った知の営み」（51頁）であることを論じている。

「第2章 社会福祉における固有な人間理解」は、人間理解について「存在者」「存在」「他者」の3つの次元を設定し接近している。客観的な「その人」という文脈で理解されるのが「存在者の次元」であり、「文法上の主語」（89頁）として、「私は～」の文脈で理解されるのが、「存在の次元」である。さらに、「他者の次元」では、「存在の次元」にいる「私」が、「存在者の次元」をまなざしている次元であることを論じている。

「第3章 社会福祉における倫理」では、「福祉の最も根源にあるもの」という意味での福祉原理は、悲惨な生活状況の人を目の前にした時、人としてどうすることが善いのかを問う倫理の中から生まれる」（118頁）と指摘している通り、社会福祉で倫理を問うことの意味について考察し、また、倫理の諸条件について論じている。

「第4章 社会福祉における正義」では、社会福祉では重要と認識されつつも、昨今では題目化している「正義」について論じている。支援において不可抗力としてみられる「仕方がない」ことは「不正義の経験」であり、「他の可能性を抹消してしまう」（166頁）と指摘している。その上で、デリダの「脱構築」を足がかりに社会福祉における正義のありかたに言及している。

「第5章 福祉の心の復権」では、社会福祉は対人支援を業としているにも関わらず、「心」が置き去りにされていることを指摘し、社会福祉における「心」の意味

について論じている。

「第6章 ソーシャルワークにおける自己覚知の内容と機能」では、社会福祉支援の基礎でもある自己覚知とは、「対象化された自己」(222頁)の理解に加え、「自己を多面的全体像」で理解すること、そしてそのことが「福祉原理の理解を可能とする重要な働きも担っている」(239頁)と指摘している。

「第7章 社会福祉の本質についての試論」は、昨今の社会福祉を取り巻く学問的環境は、「社会福祉学」が「学」として確立していることを前提としてなされているが、そもそも「社会福祉学とは何か」に対する答えは、依然として不透明である。本章では、今まで見てきた「福祉哲学」という立場から、社会福祉学の本質に迫っている。

「終章 社会福祉の目的再考」は、明らかにした社会福祉の本質から導かれる社会福祉の目的について考察している。社会福祉の本質とは「すべての人の声に、等しく(公平に)かつ積極的に応えること(297頁)である。筆者も指摘しているように、そのような社会は「決して実現しない」(307頁)かもしれないが、それでも希求していくことこそが社会福祉の使命であり、その理論的根拠に「福祉哲学」を挙げている。

本書の核心は、筆者の中に生じた問いを「社会の次元」にまで高めたところにある。「私-他者」の問題として捉えれば哲学的なだけであり、「社会福祉学」というのは遠い彼方の出来事ではなくなる。しかし、思考によって切り拓らいた次元を、社会に還元することで「福祉哲学」としての広がりを見せることができたと言えよう。

なお途中に八つの「コラム」が挟まれているが、深い思索が続く本書の中であってその語りかけに、ある種の清涼剤のような心地よさを感じる。しかし、このコラムの役割は重要で、平易な言葉で書かれているものの、示唆に富む味わい深い内容となっており、自然と「哲学すること」へ誘う、広い入口としての役目を果たしている。

3 筆者への応答(問いの共有)

本書の冒頭で述べられている「問いを共有することが福祉哲学には求められる」(2頁)という指摘は深く重い。「問い」を共有することでしか、その先にいる「利用者」と呼ばれる人たちの尊厳を開示する社会は実現しない。そこで、私なりに問いを共有し、筆者への応答を試みたい。

社会福祉を、資本主義経済体制の矛盾を是正する制度

として捉え、「貧困」がない社会を実現するために活用することは、重要でとても意味がある。混沌とした現代社会においては、社会福祉の果たす役割はますます大きくなり、すべての人にとって関係すべきインフラであるといえるだろう。と同時に社会福祉を取締りしていけば、支援者である「私」が相手と出会い、相手の日常生活に入り込み、相手との関係の上で繰り広げられていることに行き着く。このときの「相手」は、どこまでも「他者」であり、決して「私」ではない。この「断絶」に気づいたとき、支援者である「私」は自らの無力さと向き合わざるを得なくなる。この事実に対して、「私」はどうするのか。無力であることは、「仕方がない」(165頁)こととしてあきらめるのか。この問いは、他ならぬ「私」が、「私」に向けて発した問いである。

筆者は支援者としての実践から、「人間とは何か、なぜ人は支援をするのか、そもそも社会福祉とは何か」(1頁)という3つの素朴な問いを抱き、本書の出発に据えている。この種の問いは、社会福祉に携わる者であれば、誰でも一度は抱くかもしれない。しかし、日常の忙しさの中でその問いを忘れ、あるいは答え切れない問いに疲れ、つい後回しにしてしまう。そして、「私は私の世界を生きてい」(81頁)のだから、「私は私。他者は他者」(81頁)という了解を許し、「私」と「他者」との間に「断絶」を生み出してしまっている。その立ち位置から「他者」と向き合うから、例えば、「他者」が感じている「痛み」を、「痛さ」という「知識」でしか理解できていないのに、それで自らを納得させて、問いから目を逸らしたことを正当化し、安定を得ようとしてしまう。

「私」の問いは「私」の思考段階を経て整然とされるかもしれないが、一方で「他者」は、私の「世界」のうちで「登場人物に格下げ」(130頁)されても確実に「存在」しているのだから、社会福祉学が根本的に問わなければならないことは、実は、この「断絶」を乗り越えることに真摯に向き合うことなのではないだろうか。

筆者は、「『悲惨な生活状況の人を前にしたとき、胸が痛み、何とかできないか』と思う福祉の原初的な体験」(122-123頁)を、阿部志郎の文献を引用して説明しているが、筆者がいう「何とかできないか」という問いが現れる場が「世界を我有化」(129頁)する「私」である以上、「他者を思考することは不可能」(143頁)ということを引き受けつつも、自己完結させずに、「他者」との向き合い方を問わなければなるまい。

筆者はこの断絶を乗り越える出発点に、「他者に対す

る責任」(143頁)を挙げているが、「他者と出会ったとき」から「福祉哲学」は始まるのではないだろうか。

社会福祉にとって「他者と向き合う」ことは必然である。たとえ逃げようと思っても「他者」の生活に関わっている以上、「向き合わなければならない責務」があることに気づかされた。

4 おわりに

本書は、社会福祉学界における近年まれにみる深く重たい価値ある学術書であることは間違いない。しかし、研究者が自己の研究領域を深めたり、あるいは知識を広げたりするためだけに資する学術書として活用されることに留まるべき書ではない。むしろ、実践の中で悩み苦しむ、それでもなお、他者との距離を縮めようと努める支援者に目を通してもらいたいし、むしろ支援者にこそ筆者の「想い」は、強く届くのではないだろうか。

いずれにしろ、社会福祉と携わるすべての者にとっては、必読の書となることは間違いない。

